同朋大学“いのちの教育”センター講座一覧

連続いのちの講座　テーマ “いのち”の教育　会場 Do プラザ閲蔵　無料

7/23(木) 17:00～18:30

西田幾多郎の芸術思想

講師　佐藤　誠（本学 文学部人文学科 教授）

10/1(木) 17:00～18:30

“同朋和敬”について

講師　安藤　弥（本学 文学部仏教学科 准教授）

10/22(木) 17:00～18:30

子どもたちの育ちに学ぼう

講師　脇淵徹映 氏（(公社)大谷保育協会理事長／長良保育園園長）

12/3(木) 17:00～18:30

ブッダ最後の旅

講師　玉井　威（本学 人間福祉研究科 特任教授）

2/4(木) 17:00～18:30

親鸞の生死観

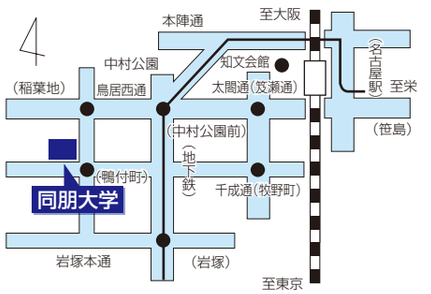
講師　小島恵昭（本学 人間福祉研究科 教授／“いのちの教育”センター 主幹）

※今年度より開始時刻が早まりました。ご留意ください。

所　員

センター主幹：小島　恵昭（人間福祉研究科 教授）
所　　員：田代　俊孝（文学研究科 教授）
所　　員：佐藤　　誠（文学部 教授）
所　　員：木野美恵子（社会福祉学部 教授）
所　　員：平野　仁美（社会福祉学部 専任講師）

同朋大学 周辺地図



交通　**市バス**／栄又は笹島より㉔系統稲西車庫行、鴨付町下車
地下鉄／中村公園より⑬系統稲西車庫行、鴨付町下車

お問い合わせ先

同朋大学“いのちの教育”センター
〒453-8540　名古屋市中村区稲葉地町7-1
☎ 052-411-1373

ISSN 1340-8070

BRIDGE

●同朋大学 “いのちの教育” センターだより

INDEX

巻頭エッセイ …… 1
シリーズ（福祉にみる“いのち”㉘）…… 2
コラム「人間を考える」② …… 3
2015 年度講座案内 …… 4

同朋大学 “いのちの教育” センター
〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1
TEL 052-411-1373
Eメール宛先　inochi@doho.ac.jp

2015.7.1 NO.42

共に学ぶ ～ある保育者従事者研修会から～

平野　仁美

先日、大谷保育協会東海連区保育従者研修会が愛知県岡崎市で開催された。

テーマは、「誕生～誕生会をプロデュースしよう～」であった。筆者は、パネラーとして招かれその会場に出向いた。参加者は約 190 人。日々、保育現場で保育実践をされている大谷保育協会所属の幼稚園、保育所の先生方である。

午前中は、「甘露の法雨」、「七歩歩行」、「天上天下唯我独尊」について保育者が研究し内容をまとめ発表をした。その発表をもとに、園行事としての「花まつり」の保育について、パネラーと一緒に保育実践の意味を考えていった。筆者は、宗教色のない保育園で 33 年勤務して来た為、この会の内容が非常に新鮮で、この一日の研修会を通して、仏教園の保育実践について改めて多くのことを学ぶことができた。まず、誕生についての学びとして、お釈迦様の誕生に関わる 3 つの言葉の意味から保育実践を考えていることがわかった。お釈迦様の誕生とこの世に生まれ出（いづる）命の誕生は同じように尊いものである。そこで、「天上天下唯我独尊」は、「天上」は時間の長さであり、「天下」は場所の広さ、「唯我」は無条件、「独尊」は無比（他と比べることのできない人）である。ここから、尊い命について子どもたちに伝える保育の工夫が実践には必要だということが理解出来た。「ウ～ン、なるほど」と感心した瞬間、パネラーである筆者と同じようにうなずく保育者に混じって、若い保育者の表情は、すっきりしない雰囲気が醸し出されていた。ここからは、もう一人のパネラーである大谷大学の冨岡氏との呼吸が繋がり、「この保育者たちにもう少しわかりやすく伝えよう」と考え工夫の紡ぎ合いができた気がした。研修後に参加者の若い保育者から「経典の言葉の意味と保育と繋がるお話が聞けて、この研修は面白かったよ」、「発表内容は、難しかったけど、先生方のお話で分かった気がした」と伝えられてほっとした。パネリストも参加者も共に学べた気がした。

午後は、参加者が14グループに分かれて、約2時間のディスカッションを通して、誕生会プロデュースをした。その発表内容は、ただ話し合われたことをまとめるだけではなく、寸劇あり、誕生会さながらの場面を演じるものもあり、「さすが保育者」と絶賛すべき発表が続いた。

仏教保育の実践をどのようにしていくのかは、先生方の学びや工夫の輪が保育実践に込められ、広がることの繰り返しであると考える。真面目に仏教の意味を保育に活かそうと研究している内容や保育者の素敵さやコミュニケーション力を実感し、パネラーとして選んでいただいた役割の重さを感じた有意義な一日であった。

（本学　社会福祉学部社会福祉学科　学科長 ／ 本センター所員）

シリーズ 福祉にみる“いのち”㉘

どんな「いのち」も受け止められる社会に

藤林　清仁

２月に娘が生まれた。それまで、仕事中心だった私の生活が、娘中心の生活へと変わることになった。娘との今しかできない関わりを大切にしたいと思い、学生たちには悪いと思いながら、夕方になるべく帰るようにしている。妻の育児休業期間が終われば、保育所への送り迎えが始まる。娘は一時期、待機児童になっていたため、家の近くや駅の近くにある園へは入れなかった。３月末に通える保育所が決まったものの、私が車で送り迎えをしなければ通えないところにあるため、特に帰りの 19 時までに園への迎えが間に合うか不安に思っている。

そんな育児生活が始まっているが、子どものことに関して、結婚前から妻と話していたことがある。それは「どんな子どもが生まれて来ても育てる」ということだ。だから、出生前にできる検査は何もせず、ありのままを受け入れようと決め、子どもの誕生を待った。予定日を過ぎてもなかなか生まれず、心音が低下して緊急帝王切開手術となったときは心配したが、今のところ元気に育っている。

なぜ、こんなことを書くかというと、2013 年春に始まったダウン症など胎児の三つの病気を対象とした妊婦の血液を使って検査する「新型出生前診断」において、「これまでに陽性と判定され、羊水検査で診断が確定した妊婦の 97%が中絶を選んだ」という記事が、2015 年 1 月 13 日付の毎日新聞に掲載されていたからである。この記事を読んだとき、「いのち」が選択されていることに悲しさを感じた。そしてこれは、障害のある子どもたちが幸せに暮らすことはできないと考えている人の多さを示しているのではないかと考えた。

私が障害のある子どもたちとその家族に関わるようになったのは、大学３年の社会福祉士現場実習が最初である。施設での実習はとても楽しかった。子ども一人ひとりのペースに合わせた、生活を中心とした療育と、母子通園のため子どもと一緒に通っている母親たちの明るさ。将来はこういうところで働きたいと思い、実習終了後もボランティアとして通い続けた。そして、通い続けたことで気づかされたことがあった。実習中に明るいと思っていた母親たちの「子どもの障害受容に対する葛藤」に接することになったからだ。そして、子どもが社会に受け入れられるかの不安。また、子どもに障害を「持たせてしまった」と自分を責める母親もいた。懇談会などで泣きながら話す母親たちを見るたびに、私が母親たちの一面しか見ていなかったことを感じた。そして、当時の私には、その悩みにこたえる知識を何も持っていなかった。この悩みにこたえられる本はないか、私は学ぶようになった。そして『障害乳幼児の地域療育』（近藤直子・白石正久編：2003 年）に出会い、大学院へ進学することにした。

あの障害のある子どもたちや母親たちと出会って 14 年になる。結局、実習でお世話になった療育施設には短大へ就職が決まるまでの 5 年間通い続けた。母親たちの悩みに対しても、今は「障害があっても幸せな生活はある」と話すことができる。一方で、親が子どもの将来を悲観して殺してしまう事件も後を絶たない。そして、「新型出生前診断」が始まり、障害があることを理由に生まれることすらできない子どももいる。

今の社会、競争に勝たねば生き残れず、幸せな生活を送ることができないと考えている人が多いのではないかと思う。これは、障害のあるなしに関わらず、多くの人が感じている不安ではないだろうか。自分は絶対に大丈夫だと言える人は少ないだろう。

だから、誰もが安心して生きられる社会にしたい。そんな社会になれば、母親たちの悩みも、時間はかかっても少しずつ小さくなっていくものになるのではないかと考えている。

（本学 社会福祉学部社会福祉学科　専任講師）

コラム「人間を考える」②

『もののけ姫』に〈仏教〉を読む

安藤　弥

〈浄土真宗〉の視座から、映画『もののけ姫』に〈仏教〉を読み出してみたい。『もののけ姫』は 1997 年公開の宮崎駿監督によるアニメ映画である。宮崎作品には必ずテーマとメッセージ性がある。『もののけ姫』は、パンフレットに歴史家網野善彦の寄稿があり、〈歴史〉的課題との関係がよく指摘される。その〈歴史〉的課題の根底にあるのは、実は、人間としてどう生きるかという問題であり、それは正しく〈宗教〉的課題である。

①生きろ

物語の中盤、石火矢で撃たれ瀕死のアシタカがサンに言う（この構図も絶妙）。映画のキャッチコピーでもあるが、このメッセージのシンプルさは重要である。アシタカは「～のために生きろ」とは言わない（生命より大切な～と言うのは時に危険である）。「そなたは美しい」とだけ言う。生きることそのものに理由は要らない。その生命（いのち）をそのままに生きること自体に意味があり「美しい」。ここに「無量寿」（はかりしれないいのち）の世界を読み取ることができる。

②オトキ

物語の後半、明け方のタタラ場で、全身に白包帯を巻く女性が懐から食べ物を取り出し、甲六の妻トキに渡す。前者はハンセン病患者＝差別された人を描いているとされる。歴史的には、被差別民が差し出す食べ物をそうでない人たちが受け取ることはないという。しかし、トキは受け取って食べる。彼女の名前が示唆するのは「御斎」（オトキ）である。オトキの場では、仏前において皆平等の関係で食事をする。このシーンには、差別なき世界への願いが込められている。

③ともに生きよう

物語の最後で、森に帰るサンに、アシタカが「サンは森で、私はタタラ場で暮らそう。ともに生きよう。会いに行くよ、ヤックルに乗って」と言う（「一緒に暮らそう」とは言わない）。それぞれに大切な場所があり、生きる場所がある。一つにはなれない。それでも（だからこそ）、つながりあい、お互いを尊重しあい、「ともに生きよう」といえる世界。浄土真宗ではその関係を「御同朋御同行」という。同朋大学では「同朋和敬」といい、建学の理念にうたう。ともに「南無阿弥陀仏」の世界である。

以上は、『もののけ姫』から無理やり〈仏教〉を読んでいるだけかもしれない。ただ、〈私〉と『もののけ姫』から〈人間を考える〉ことができる。あとは他の〈読み手〉それぞれの受けとめ方におまかせするしかない。

（本学 文学部仏教学科 准教授）